

# 「動力車新聞」新年号 八鉄論文を弾劾する

## 「あの新幹線に誇りと確信をもち苦難に耐えながら前進しよう」と呼びかける八鉄重一

「動力車新聞」新年号は、一面に「新しい展望を切り開こう」と題する「中央執行委員長・八鉄重一」の論文を掲載している。

この八鉄論文を一読しておどろいたことは、一面中央にある八鉄の顔写真と「八鉄重一」という名前を「国鉄総裁・高木文雄」にそっくり入れ替えても十分に通用する文章であるということである。

この新年号論文は、昨年一年間、動労「本部」革マル反動分子が政府・国鉄当局の攻撃の前に「きつぎと屈服し、裏切りを重ねてきたその到達点を自ら示す極めて象徴的なものである」といえる。われわれは、以下この新年号論文批判を徹底的に行い、動労大改革―国鉄労働運動の戦闘的再生にむけて奮闘しよう。

### 国鉄総裁・高木のあいさつと みまがう反動的な年頭論文

八鉄論文のはじめは、およそ次のようなものである。

すこし引用が長くなるがその反動性がよく現われているので以下引用する。

『過ぎし八二年は、国鉄にとって過酷な攻撃のもとにありましたが、それでも東北と上越の新幹線が開通し、それは国鉄百年の歴史からみても画期的な年であった：』

『新幹線に象徴される国鉄の存在は、行革ファイバー：：によってつくりだされている国鉄否定とはまったく異なるもので、その存在に私たちは、誇りと確信をもちべきだ』

『：：：国鉄を支えてきた国鉄労働者の根性と誇りを未来につなぐためにもあの新幹線が風雪をけて疾駆するように、苦難に耐えながらも前進しなければならぬ』

なんとという反動的ないいぐさか。

この論文は、八鉄の名前と顔写真がなければ、「国鉄総裁・高木文雄」の年頭あいさつを「動力車新聞」が掲載したのかと思われるような極めて反動的なものである。

### 動労組合員の「魂」まで 売り渡そうとする動労「本部」

この八鉄論文の反動性の第一は、東北・上越新幹線建設を「国鉄百年の歴史からみて画期的」と最大の賛辞を送っていることである。

そもそも新幹線網の建設は、大独占資本の要請にもとづいて、国鉄労働者に殺人的劣悪な労働条

件を強要すると同時に実質的運賃値上げによる大衆収奪の強化をもたらすものである。

昨年一年間、動労「本部」革マルは、一体全体何をやってきたというのか。

「働き度」方針の強要にはじまり、職場規律の確立、ブルトレ旅費返上、現協廃止、五七・一全面協力、パス廃止、東北・上越新幹線開業協力：：：。

国鉄当局の攻撃に対し全て屈服と協力を行ってきたのが、動労「本部」革マルとその頂点にある八鉄自身ではなかったのか。

八鉄論文の反動性の第二は、こうした意味を持つところの新幹線に対して、「誇りをもて」「確信をもて」とし、しかも「あの新幹線のように苦難に耐えて前進しよう」と動労組合員によびかけていることである。

かって、これほどの「国鉄への賛辞と国鉄への翼賛」があったのだろうか。

これこそマル生そのものでなくてなんであろうか。

しかもいままで、多くの国鉄労働者が真に誇りとしていた（今でもそうだ!!）「闘う労働組合」「合理化はされても魂までは売らない」としてきたことを、動労「本部」八鉄は、こともあろうに公然と「国鉄に誇りをもて」「国鉄労働者よ、闘う魂を放棄しろ」「苦難に耐えて新幹線のように前進しろ」とよびかけているのである。

こんなことがどうして許されようか。

動労「本部」革マル・八鉄は、八三年年頭において、自ら天にむかってツバする行為を行った。必ずや、国鉄労働者の反撃でこの反動的「よびかけ」を粉碎しよう。